いのちと地域を守る

車避難 ルール化必要

タルカウアノ市

タルカウアノ市のむすび塾は8日、ビジャ・マル町内会集会所で開き、複数の町内会の役員ら4人が出席した。チリ大地震津波では市内で23人が亡くなり、開催した地域からも犠牲者が出た。津波から避難する場合の高齢者支援や自動車の利用について意見交換した。

現地では「思い出したくない」との理由で、2013年10月の避難訓練は参加者が少なかった。木村理事長は冒頭、「ま だ悲しみは癒えないかもしれないが、子どもや孫を守るために避難対策を考えてみよう」と提案した。

参加者は、高齢者の避難に試行錯誤している地域の現状を説明した。ある町内会は高齢者の人数や住所のほか、手助けが必要かどうかを把握する責任者を決めていた。避難訓練で避難路の表示板の見やすさをチェックしたり、車いすで避難する際の問題点を調べたりした地域もあった。

後藤さんは「災害時は家族や近所、職場の人で助け合う『共助』が重要になる。日中に地域にいる住民たちで、高齢者を支援するネットワークをつくってはどうか」とアドバイスした。

車避難に伴う渋滞の危険性は、チリでも認識されていた。車の所有台数は多いが、どの町内会も地域に何台の車があるかを把握していなかった。車で逃げることを想定した避難訓練は実施していないという。道路幅が狭いことも不安材料だ。

日本では震災を契機に、車避難が原則禁止から、条件付きで容認へと変更された。木村理事長は「みんなが一斉に使えば渋滞する。車を避難に生かすには、高齢者を逃がす車に限定し、経路も決めるなど地域のルールづくりが必要だ」と解説した。

チリ大地震津波の発生時、政府は被害状況を確認せずに津波警報を早々に解除した。当時の大統領も「もう津波は来ない」とラジオで呼び掛けた。その後、津波に襲われたため、犠牲が拡大したという見方がある。今も多くの遺族が当時の政府の対応に怒りを投げ。

避難指示について、地元の参加者が、日本の防災行政無線のような通信システムの整備を望む意見を述べた。これに対し、話し合いを見守っていた遺族らは「技術に依存するのは危険。自分の感覚や経験を生かし、自ら避難することが大切だ」と訴えた。

ビジャ・マル町内会で、緊急対応委員会責任者を務めるイルマ・ビジャヌエバさん(51)は「日本も津波で大きな被害が出て、津波避難についてに解除したことを知った。車避難のルールはチリにはないが考え方で、ワークショップは非常に参考になった」と語った。

むすび塾の参加者は東日本大震災の報道写真を回覧し、衝撃を受けた。議論を聞いているうちに当時を思い出し、涙ぐむ女性も。津波で浸水した沿岸部には、1階が柱と梁（はり）だけのピロティ構造の復興住宅が建設された

減災・復興支援機構 木村拓郎理事長

課題共有 大きな意義

「むすび塾」の座長を務めた減災・復興支援機構（東京）の木村拓郎理事長に、チリで開催した巡回ワークショップを振り返ってもらった。

◇

―2013年4月のインドネシアに続き、2度目の海外開催だった。

「地震や津波に関する日本と子リの交流や協力は従来、国などの公的機関や研究者に限られてきた。備えは地域住民も重要な役割を担う。今回、被災した住民同士が直接交流する機会を設けることができたのは、画期的だと思う」

―津波災害の伝承が大きなテーマだった。

「津波災害は数百年で発生する。対策を取るとしては記録を残すことが重要だが、チリではその作業への関心が低いようで心配になった。1960年のチリ地震津波の経験者も高齢化が進む。今のうちに体験談を聞き取り、実態を調べてほしい」

「防災・減災を強く意識しているわけではないが、家庭内では60年の経験や教訓が語り継がれていると感じた。2010年に多くの犠牲者を出したオレゴ島には慰霊碑が建てられた。祈りを続けることで、津波災害の風化を防げるのではないか」

―住民の一部は、将来の災害に備えて動きだしている。

「住民自身が考え、行動する意欲は、日本より高いと感じた。防災・減災に取り組む上で重要な要素だ。ただし、自分たちの活動が正しいのか分からず、知恵を授けてくれる人もいないようだ。課題を共有し、一緒に解決策を探ったワークショップのプロセスに、大きな意味がある。語り部活動の重要性が認識されたのも収穫だ」

「日本の防災教育や避難訓練への質問が多かった。災害対策を個人から地域に広げる必要性を、チリの住民も自覚し始めている。日本が備えのノウハウや情報を提供することは国際貢献だけでなく、震災後の支援への恩返しになる」

―チリでは、住宅再建が急ピッチで進む。

「復興のスピードや産業再生を重視している。漁師たちは海と向き合う生活を長年続けてきたため、地震後すぐに津波襲来を予期して、高台に避難したという。自然には勝てないと理解し、揺れたら逃げる意識が染みついている。

私は1960年のチリ地震津波を経験している。東日本大震災が発生した後も「津波が来る」と直感し、急いで家族と高台に逃げた。津波警報のような情報に頼らず、自分で